

息のはずむ体を病床に起こした。やがて透き通る祈りの声が続き、裂帛の気合いがかかる。まさに胸を貫くような烈しい気合いが全身を包んだ。

そして彼は私に予言した。「十月の聲がかかれば、私のお宮にお詣り下さい」と。

私のもとより、看護している母と姉も、いくら老翁の言葉とはいえ、信じることは難しかったが、「はい」と答えるばかりだった。

しかし、前にも記したように、老翁から指示された大祓詞を唱えるうちに、私の健康は急激に回復していった。馬場翁は、その間、「寅の刻詣り」という荒行の祈願をこめていてくださったという。そして、たしかに十月には外出できるようになり、その月の末には、なんと小豆島巡拝に行くことになったのである。

それも老翁の指示であつた。「あなたは小豆島の巡拝に行き、捨て身の修行をするのです。あなたは死ぬことはない。生きて生きて、国家のために命を捧げるのです。神仏の神秘と奇跡を信じて行ってくるがよい」と。

私は、「死んでも行く」と決心して、巡拝の旅に出た。大病直後の身に、それは途方もない苦行だった。しかし、七日の行程を終え、無事に帰ることができた。わが家に戻った時には、不思議に全身に活力が蘇生していた。

これが私の信仰生活の出発点の出来事である。この馬場翁は翌年二月二十六日に他界された。まさに私の「身代り」であつたのだ。

その私は、死にかけてあの世をかいま見たこと、そして何よりも、老修行者の「わが身に代えても」という祈りによつて命を得たということで、信仰と修行の生活に歩みを進めていった。神秘主義に関する本をむさぼり読み、また小豆島の霊場で荒行にも励んだ。

二度目の出来事は、小豆島巡拝を始めて足掛け三年目のことである。昭和二十年、正月の末の大寒の頃だった。

小豆島はいたるところに神社仏閣があり、その霊場をめぐって約百四十キロの道を五日から七日間で歩くのが巡拝の習いである。霊場のいたるところに「大願成就」と書かれたコルセットや松葉杖が奉納されていて、多くの人が霊験をいただいた印となっていた。

私は十人ほどの団体で、巡拝を始めた。その途中、池田町の手前で、一行と別れて一人になった。前回巡拝した時にお世話になった風穴庵というところへ御礼に行きたいと思つたからであつた。

池田町に入って、ある寺があつた。その名前をどうしても思い出せないのだが、大きな